1112E

弔辞

徳永さん、大阪工業英語研究会講師の水上龍郎です。

昨年八月、研究会のきもいりで、あなたの米寿記念のお祝いを兼ね、ここ茨木市のホテルでしばらくぶりの交歓会を催しました。そのとき、お子さまの車でお帰りになるお姿を見送ったのが、あなたとのすばらしい交情を締めくくる最後の瞬間になってしまいました。あの会の席上で、会員のみなさんと旧制高校の校歌や寮歌を楽しそうに唱和なさっていたお顔が目に浮かび、いまは感無量です。

思い起こせば、もう十数年前になりますが、研究会の誕生とそれに続く熱心な活動を通して徳永さんとわたしたちの出会いが始まりました。東北大学を出られて、大会社の取締役を経験なさっているということで、およそ三十才近くも年下のわたしとしては、たいへん教えにくい、こわい生徒さんという印象が初めにありましたが、あなたはすべての点において謙虚そのもの、わたしの思惑はまったくの空振りでした。あなたは、当時すでにかなりのご高齢であったにもかかわらず、率先して幹事の激務を引き受けられ、長年にわたって会の運営に貢献なさいました。その努力と功績は、わたしを含めてこの会のだれもが深く胸にとどめている事実です。

徳永さん、あなたは、研究会のような地味な活動は、東京ならいざ知らず、大阪ではたいへん難しい、しかし一旦灯し

たこの明りを消してはならない、それは自分のためばかりでなく、関西在住の会員のため、ひいては日本のためである、という信念を最後までまげず、ともすれば挫けがちなわたしや会員の方々を励ましてくれました。教室では、いつも最前列に座席を占め、わたしの書く文字や表現を確実にとらえられない場合は、納得するまで確認をとられていました。一回の勉強時間は数時間にもおよぶのに、あなたはノートをしっかり取って、これを二年間単位でまとめ、「水上先生講義録」という名称で最終第七巻まで本の形に作成、全会員に配布なさいました。手書きで総ページ数一千四百ページ、いまではたいへん貴重な資料としてわたしどもの手元に残っています。年一度の研修旅行では、わたしはいつも部屋をご一緒させていただきましたが、就寝前のひとしきりの歓談、たとえば、英語の簡潔表現と俳句との関係などにについての意見交換が終わると、「先生のふとんはこの位置でよろしいですか、自分はトイレが近いのでこちらをとりますが、よろしいですね」とおっしゃって、終始姿勢を正しておやすみになっていたことが、つい昨日のように思い出されます。

徳永さんとわたしとのつながりを永遠にしたエピソードにこんなこともあります。それは、まだ初めてお会いして間もない頃でしたが、あるテーマの勉強会で、わたしが「ジ・オウンリ・サン」という英語は、いつでも「唯一の太陽」などと無感動に訳すべきではない、時には「このかけがいのない太陽」と訳せるような表現に豊かさをもってほしい、というような講義をしたことがあります。徳永さんは、これに対し

て「目からうろこが落ちた」とおっしゃられ、その後も何かの折りにつけては、この話しを引用され、わたしを引き立ててくださいました。何でもないことのようですが、徳永さんとわたしとの、もしいわせていただくなら信頼に根ざす、年齢差を超えた「友情」といったものが、ここから生まれたのではないか、と思っています。

徳永さん、あなたはいま、形を失われましたが、わたしたちは徳永さんの残された数々の人間学的レッスン、そして少年にように純粋な、ものを見る目を決して忘れず、研究会の灯火（ともしび）を絶やさないようにがんばります。あなたのような方にお会いできたことを、わたしはほんとうに幸せと思っております。あなたのお心は、ご遺族の皆様と同じく、わたしたちの中にもしっかり残りました。場所は全然ちがうかもしれませんが、いつかまたお会いして、英語のこと、俳句のこと、はたまた電池の技術など、意見の飛び交う日がくることを信じています。

長い間ありがとうございました。しばらくは、ごゆっくりとおやすみください。さようなら、徳永さん。

平成六年四月三日

大阪工業英語研究会会員代表として

講師　水上龍郎

（OSTECジャーナル 創刊号 1994年8月）